友

ズラえもん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
友

【Ｎコード】
Ｎ４５９８Ｅ

【作者名】
ズラえもん

【あらすじ】
いつも笑ってばかりの光男、大介はそんな光男の笑い声が気に障って仕方が無い・・・・人気の無い場所に呼び出し光男に殴りかかる大介！だが光男の笑いには悲しい理由があった・・・

ここは、県立“望み学園”　能開支援センターと呼ばれる施設だ！

能開支援なんて聞いても、何の施設なのか誰もピンと来ないだろう・・・わかりやすく言えば、親に捨てられた子供達を集め、いつ社会に出ても適応出来るだけの学力と、それぞれに合った技能を開発する所・・・早い話が職業訓練校を兼ねた“孤児院”さ！

と言っても学校には孤児ばかりがいるわけじゃない。

俺たちがいる建物とは別棟になるが、高等部があり、生徒の数でいえば家から通う一般学生たちがほとんどで、望み園はその校内の外れに位置するいわば宿舎のようなものかな。

来年には俺もここから高等部へ通う手はずになっている！

望み園から高等部に通うのはこの俺が第一号となるらしい！

俺の名前は川村大介（かわむらだいすけ）１５歳・・・生後５日目からここにいるんだ。

親の顔なんか知らないし、知りたいとも思わない。

ここには今、同じような境遇の者たちが２０名暮らしている。

俺と同年代では、深雪って女と、一月ほど前にやって来た光男って男がいるが・・・光男の奴はいつもヘラヘラ笑っているし、深雪はブスのくせにお高くとまってる。

あとは一番近くても小学校の低学年・・・当然気の合う奴なんか居やしないさ！

光男が来たとき、俺にも友達が出来るかな？　なんて期待したものの、俺と光男とは仲良くなんかできそうにない。

学長の話だと、光男の両親は多額の借金を作り、光男1人残して蒸発したらしい！

電話はおろか、電気さえ止められたあばら家で、光男は数人の借金取りに暴行を受けてるのを近所の人の知らせで保護された・・・て事だ。

奴は入園当日からヘラヘラヘラヘラ笑ってばかりいる。

小学生相手におどけてみたり、つまらない駄洒落を並べては涙をこぼさんばかりに馬鹿笑いをしたり・・・つまり奴は俺とは正反対・・・俗に言う水と油ってところだ！

「アッハハハハッ！」

また奴の馬鹿笑いが聞こえる・・・どうせガキ共相手にふざけあってるんだろう。

俺は奴の笑い声を聞くとムカムカと腹が立ってくる・・・何がそんなに可笑しいんだ？　箸が転んでも可笑しい年頃・・・てな例えもあるようだが、まさに奴にはうってつけだ。

「アハハハハハッ！」

俺は耳障りな奴の笑い声に、我慢の限界を感じていた。

「アハハハハッ！」

小学生に囲まれ、涙を流しながら笑い転げる光男・・・・

俺は外に出ると、笑い続ける光男に窓から声をかけた。

「おい光男！ちょっと外に出ろ・・・お前に話がある。」

俺の声に光男が振り返った。

「やあ！　大介君！　どうしたんだい？　そんな深刻な顔しちゃってさ！」

にやけ顔で振り向き、のんきそうに言う光男の言葉が俺の怒りを更に高めて行った！

「なにぃ～！　大介君だと・・・てめぇ～気安く呼ぶんじゃねぇ～いいから、さっさと出てこい！」

俺はにやけながら出てきた光男に、人気のない倉庫の裏へ来るように告げると、先に立って歩き始めた。

普通の奴ならこの時点で自身の身の危険を察するはずなんだが、光男のやつは相変わらずヘラヘラ笑いながら俺の後ろを歩いてついて

くる。

「ねえ！　大介君！　話って一体なんなのさ？」

のんきそうにそう言いながら光男の奴は、あろう事か俺の横までやって来て馴れ馴れしく肩を組んで来ややがった！

「何してんだテメ～ッ！」

俺は身体をひねり、光男の腕を振り払い奴の顔面めがけ右ストレートを放った！

”バキンッ”　と甲高い音があたりに響き、光男は鼻血を吹き出しその場にうずくまる・・・

そんな場面が俺の脳裏で展開されていたのだが、俺の予想に反し光男の奴は思いのほか身軽な動きで俺のパンチをかわした。

「アハハハハハッ！　　大介君、今一瞬すっごい顔してたよ。
　アハハハハハッ！」

腹を抱えて笑い転げる光男に拍子抜けした俺は、それを光男に悟られまいと更に声を荒げた。

「俺に馴れ馴れしくするんじゃね～ぇッ！　　俺とお前は真逆の人間なんだ、何の共通点もない！」

「アハハハハハッ！　　そうかい？　　ハハハッ・・・僕はそっくりだと思ってるけど。」

「はぁ～っ？？　そっくりだぁ～っ！　馬鹿言ってんじゃねえ・・・俺はお前の様に能天気じゃねえし・・・だいいち・・・」

俺はいったんそこで言葉を切ると、以前から感じていた疑問を光男にぶつけた。

「お前は何でいつもヘラヘラ笑っているんだ？」

光男は“アハハハハハハッ”　といつもの調子で馬鹿笑いすると

「そんなこと聞かなくても楽しいからに決まってるじゃないか」

「だから何がそんなに楽しいんだ？　お前は親に捨てられたたんだぞ。　親を恨めよ、もっと世間を呪ってやれよ！　お前は不幸なんだぜ。」

そう言った俺の顔を光男は一瞬キョトンとした表情で見つめていたが、やがて“プッ”と吹き出し

「アハハハハハッアハハハハハッ！　やめてくれよ・・・なに深刻な顔してんのさ。　アハハハハハハッ！　世間を呪え？　親を恨め？　そんな事してなんの意味があるんだい？」

俺は光男のそんな態度にイラつきながら、ブルブルと震える右の拳を抑え込んだ！

「意味はあるだろう。　俺もお前も親に捨てられた、それでここにいる・・・決して望んでなんかいなかったはずだ。　それだけならまだしも、近所で万引きでもあってみろ、施設にいるってだけで世間の奴等は真っ先に俺らを疑いの目で見てくる。　もし俺らが世間の子供達と一緒に遊んでたりしてみろ、奴等の親は慌てて連

れ帰るぜ・・・　“施設の子達と遊んではいけません！あそこにいると心がひねくれてくるんだから・・・”　なんてひそひそと囁きながら。」

光男はまた大きな声で笑った！

「アハハハハハッ・・・そんな事無いと思うよ！　それは君が自分に自信を持たないから世の中がそんな風に見えるんだよ、もし本当にそうだったとしても別にいいじゃないか、そうじゃないって事は自分自身がわかってるんだし、それにさっき君は僕が不幸だって言ったけど、僕は不幸だなんて思わないよ。」

“ケッ！”　俺は光男の言葉に半ば呆れながら　「お前は馬鹿なのか？　・・・不幸じゃないだと！　じゃあお前は自分が幸せだと思ってるのか？　今の生活に満足してるって言うのか？」

「アハハハハハッ！　満足？　満足はさすがにしてないよ・・・してないけど不幸じゃない・・・大介君、物は考えようだよ、君は両親に捨てられた。　この事実は曲げようがない、でもそうするしかなかったご両親も辛かっただろうし、一生その罪と後悔から逃れる事は出来ない！　きっと苦しんでるはずだ。」

思いもよらぬ光男の言葉に、固く握り締めていた俺の右の拳から力が抜けていった。

光男はさらに続けた。

「いいかい、こんなふうに考えたらどうだろう？　君は両親からこの世に生を受けた、だからこうして生きている・・・親と子供はいつまでも一緒にはいられないんだ。　子供は大人になりやがて自

分の道を歩きだし、　親は子供より先に逝く・・・だから必ず別れが来る、君はそれが他人より早かっただけなんだ！」

そう言って光男は、さっき俺が先導していた方向に向かい、先に立って歩き出した。

俺は無言のまま後に続いた。

倉庫の裏には小さな花壇があり、俺と光男はどちらからともなくコンクリート製の花壇の縁に腰を下ろした。

光男は綺麗に咲いた色とりどりの花の花びらの一枚を指先で触りながら

「大介君！　　最近さぁ、テレビのニュースなんかでよく耳にするだろ・・・子供が親から虐待を受けたり、親の都合で無理心中の道連れにされたり・・・

その子達はみんなそれぞれに夢を持ってたはずなんだ、それを自分達のかってな判断で奪い去る！　その子達の笑いも涙も怒りでさえも、命と共にこの世から消えてしまうんだ・・・！」

そう言う光男の顔が心なしか曇ってみえた。

相変わらず無言のままの俺に、光男は白い歯を見せてニッコリ笑った。

そして光男は俺の肩をボンと叩き

「アハハハハハッ！　　だからそんな深刻な顔するなって・・・

君は両親に捨てられたんじゃ無いんだ！

君は両親に生かされたんだよ、夢を与えられたんだよ。

君は“世の中を恨め”　なんて言ったけど、そんな事して一体何になるんだい？　それで君は幸せになれるのかい？

人間の一生なんて何処でどうなるかわからないんだよ・・・同じ人生ならしかめっ面して生きるより、笑って暮らしたほうがいいと思わないかい？」

そんな言葉は今まで幾度と無く聞かされてきた・・・慣れっこになっているはずだった・・・“ふざけんじゃねぇ！！”　いつもならそう大声で叫んでいたはずだ。

だが光男の言葉には妙に説得力があった。

光男の口から出てくる言葉の１つ１つが、なぜか俺の心の中に素直に溶け込んで来る！

俺は、頭の中に張りつめていた霧が、一瞬の内に晴れ渡るような感覚に襲われていた。

それは今まで経験したことの無い不思議な感覚だった。

俺は自分自身に問い掛けていた。

“おかしい・・！　俺はどうにかなっちまったのか？　な・なんで俺はこんなに素直に受け止めてるんだ？　なんで腹がたたないんだ？”

「アッハハハハハハッ！」　光男が大声で笑った。

そんな光男の姿を見ていると、何だか考えるのも馬鹿馬鹿しく思えてきて、俺の顔にも自然と笑みが溢れていた！

「アハハハハハハッ！」　俺と光男は互いを指さしながら大声で笑った・・・腹を抱え、涙を流しながら！

あれから、俺と光男は常に行動を共にするほど仲良くなった！

“アハハハハハッ！”

また光男の馬鹿笑いが聞こえる・・・俺は自分でも“なぜ？　どうして？”と言う疑問を残しながらも、あれほど不快だった光男の笑い声が今は心地よく響いて来るのだ。

光男の奴は人を引き付ける何かをもっているのだろう、お高く止まって可愛げのなかった深雪までもが満面の笑みを浮かべ、光男の横でくだらないジョークを並べている。

毎日が楽しかった。

“今まで俺は何をしてたんだろう？　意固地になり殻に閉じ籠っていた。いったい何に腹をたて、何が辛かったのか・・・・”

光男を見ていると、今までの俺は自分で造り上げた空想の世界で生きていたような気分になる！

俺と深雪は、光男をリーダーにお笑いグループを結成した！
光男の考えたネタを俺と深雪で組み立てる。　そして週に1度みんなの前でネタを披露する・・・みんなもそれを楽しみにしていた。

だがそんな平穏な日々も長くは続かなかった・・・！

数日後・・・・望み園の前に1台の車が止まり、職員達の見守るなか光男は、2人の男に連れられ園を出て行ったのである。

2人の男をやくざ者だと思った俺は園長に詰め寄った。

「なんで黙って連れて行かせたんだよ！　光男の奴は本当に両親の居場所なんか知らないんだ。　あいつらにどんなに殴られても光男にはどうする事も出来ないんだ！」

園長は優しい目をして俺の肩にそっと手を添えた。

そして、俺と深雪に手招きすると、無言のまま園長室に招き入れたのだった。

そこで聞かされた話しに、俺と深雪は言葉を失い、ただガタガタと震えていた！

それは、とても信じられない話であった。

光男の住んでいたあばら家の床下から、光男の両親の遺体が発見され、状況から判断して犯人は光男以外に有り得ない・・・との事だった！

光男は両親から邪魔者扱いされながら育った。

光男の両親は共にギャンブルに興じ、借金は膨れ上がる・・・互いを罵り、夫婦喧嘩の絶えない日々が続いた！

光男は満足な食事さえ与えられず、両親の腹いせに幾度となく殴られた・・・家庭に笑顔は無く憎悪と失意だけが光男の心に染み込んで行った！

そんなある日、苦悩する光男を奈落の底に突き落とす出来事が・・・！

光男は見てしまったのだ・・・・両親が保険金目的で自分の殺害計画をたてている場面を！！

そして、ショックのあまり半狂乱になった光男は、酔って眠っている両親を自らの手で・・・・！

光男を連れて行ったのは　、やくざではなく警察だったのだ。

園長はそれだけ言うと、後は何を聞いても答えてはくれなかった。

俺は思った。

光男はあまりにもひどい環境で１５年という時を過ごしてきた、決して笑うことなく。

だからあいつはここに来て１５年間の笑いを取り返そうとしてたんだ・・・警察の手が伸びてくるのを覚悟の上で、毎日毎日くだらないジョークで自身を誤魔化しながら。

光男はあのとき俺に言った、自分と俺がそっくりだと・・・・あいつは見ていたんだ、世間を呪い暗い目をしていた俺に、自分自身の姿を！

そして光男は俺に、自分のような間違いを犯させないためにわざと近づいたんだ・・・・

「光男・・・」　俺の両目から大粒の涙が零れ落ちた！

深雪がハンカチを差し出しながら、震える声で言った。

「だいちゃん！　こんなときこそ笑わなきゃ・・・光男君ならきっとそうしたはずよ！」

俺は大きくうなずくと　「そうだ！　そうだよ光男なら・・・光男なら・・・・」

“アハハハハハッアハハハハハッ・・・・・”

俺は笑った・・・悲しみの涙が笑いの涙に変わるまで・・・・・

そして月日は流れ・・・・

俺と深雪は高等部を卒業するとすぐ、お笑いコンビを結成した。

幾多のコンクールを勝ち抜き、今日はプロとしての初舞台・・・震える足とカラカラに渇いた喉をごまかしながら照明を浴びる。

俺と深雪は会場からの拍手と笑い声に答えるべく必死でネタをこなしていく・・・やがてネタも終盤に近づき二人の演技にも力が入ってきた。

“バシン”　深雪の振り下ろしたハリセンが俺の頭上で大きな音を立てると、俺はこれでもかって言うほど滑稽なポーズでずっこける・・・

俺はそのとき、湧き上がる観客席の片隅に、いるはずのない光男の姿を見たような気がした。

ネタを終え、割れんばかりの拍手を浴びながら控え室に戻った俺は、心の中でつぶやいていた。

“光男・・・俺はいつかきっとお前に会いに行く・・・お前がどこにいようと。　そして、俺はお前から教えられた笑いでお前を腹の底から笑わせてやる・・・ごまかしの無い真の笑いで・・・。“

そして今・・・

俺と深雪のコンビは期待の新人とまで呼ばれるようになり、今夜もこうして舞台の上に立っている・・・

”アハハハハッアッハハッハハッ！・・・”

湧き上がる観客たちの笑い声に光男の笑い声を重ねながら、これからも俺たちは立ち続けるだろう。

手を取り合い、涙を流し、大声で笑い合える友との再会を信じて・・・！！

”アハハハハッアッハハハハッ！・・・”

☆おわり☆

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4598e/

友

2010年12月14日21時07分発行